地域の宝
但馬牛物語
★48★

伝統守りつつ進化を

渡辺　大直

「福芳土井」のポスター原稿とその母牛「よしみ」の写真額を生産農家からいただいた。

福芳土井は平成を代表する種雄牛だ。そして私にとっては、『但馬牛が現役の家畜である以上、伝統を守るだけでなく、進化しなければ生き残れない』と教えてくれた牛でもある。

振り返ると、平成は和牛を大きく変えた時代だった。バブル景気の崩壊とそれに続く不況。そして日本経済は低成長時代となった。

不景気になると、高い牛肉は売れなくなる。子牛を育て、肉として出荷する肥育農家からすると、単価が下がった分、量で稼がなくてはならない。全国的に和牛は大型の牛が主流になり、コストを下げるため短期間で育ち、大規模でも管理しやすい牛が求められるようになった。

ところが但馬牛は小型で成長が遅く、1頭ずつ細かい管理を必要とし、時代のニーズに合わない牛になった。県外からの客はほとんどいなくなり、子牛価格は全国平均を下回るまで安くなった。血統にこだわって県外の牛を交えず、小型ながら、美味しい上質の肉になるのが但馬牛のウリだが、これが全く裏目に出た形だ。

〝兵庫県は今まで通り但馬牛だけでやっていくのか〟〝但馬牛へのこだわりをやめ、県外から大型の牛を入れて改良するのか〟、繁殖、肥育農家はもとより、家畜商、食肉業界、さらには貝原俊民知事や谷洋一農林水産大臣も巻き込んだ大議論に発展した。

そんな中、福芳土井は生まれた。種雄牛候補として県が購入する時、先輩たちの評価は芳しくなかった。〝ほねほそく、宍かたく、皮うすく、腰背まろし…〟といった但馬牛の伝統的な姿とは違い、骨太で、尻尾が太くて上品さに欠け、種雄牛としてはいかがなものかというのだ。

だが時代は動いている。肉質の良さを維持しつつ、発育が良く、大柄で肉量がとれる但馬牛に改良しなければならないと、購入を決めた。

福芳土井

余談ながら、名を遺した牛には、なぜか他の牛にないエピソードがある。福芳土井の場合、1年先輩の牛が不調となり、繰り上げて種雄牛としての能力評価をすることになった。それにより同期より早く種雄牛デビューし、但馬牛のピンチを救うのに間に合った。

将来、何が求められるか予見できない。それでも但馬牛が生き残っていくには、多士済々の特徴ある牛を残し、進化できる素地を持つことが必要だ。その先例を示した「福芳土井」とその母「よしみ」は但馬牛の歴史に欠かせない牛だ。いつか皆さんにご覧いただく機会を作りたいと思う。

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

(C) 新日本海新聞社　無断複製・転載を禁じます